

2 めざす子ども像に向けた授業実践に関する考察

(1) 授業の構想

単元名 エンジョイ！アタックリーグ（ゴール型ゲーム・ポートボール 3年生）

① 本単元で求める子どもの姿

本単元は、攻守交代型で4対3のアウトナンバーゲーム（攻4・守3）をとおして、みんなが楽しめる規則や、ボールを持たないときの動きを考え、ポートボールに取り組む学習である。これまでの学習の様子から、得点を取るために夢中になって動く姿が想定できた。しかし、3年生の段階では、ボール保持者しか動かず、ボールを持たない人はどうすればよいのか分からないことが多い。そこで、低学年で「空いている場所を見付けながら」ゲームや鬼遊びをした経験を発展させ、「ディフェンスのいないところへ動く」という視点を自覚する学びを仕組んだ。そうすることで、中学年の他のゲームでの空いている場所に素早く動く運動や高学年のゲームにおけるボール保持者からボールを受けることができる場所に動く運動につながると考えたからである。このような系統的な指導が、「運動の楽しさや喜びを見出し、運動にかかわり続けていく子ども」の育成につながるのである。

② 本単元で求める子どもの姿を実現するために（支援）

- ア 攻守の他に、アドバイザーや審判の役割を設定し、全員が経験できるようにする。そうすることで、みんなでもよりよいゲームをつくらうとする意欲を高めることができるようにする。
- イ 授業の終わりに、規則の工夫による楽しさの変容、役割の成果、動きの変化を振り返る活動を仕組む。そうすることで、みんなが楽しめる規則のよさや、動きの高まりを共有することができるようにする。
- ウ 動きに関する課題につながる発言があった際、6分割したコートを提示する。そうすることで、動く場所（ディフェンスのいない場所）を意識して動きを考えることができるようにする。

③ 本単元の目標

- 基本的なボール操作とボールを持たないときの動きをシュートやパスにつながる動きに生かしたり、規則を工夫したりして、易しいゲームに取り組むことができるようにする。
- ゲームに関わることのよさに気づき、競い合う楽しさや喜びを感じることができるようにする。

(2) 学びの実際 ※波線は資質・能力が発揮された子どもの姿、下線は前述の支援との対応を表す

① 次はこうしてみたいな

第1次では、みんなが楽しめる規則を工夫することに取り組んだ。規則の工夫が定着してきたとき、攻守の他に、アドバイザーや審判の役割を加えてみてはどうかと提案した。【支援ア】すると、アドバイスやジャッジの仕方についても課題をもち、話し合う姿が見られた。チームが勝てるように指示を出したり、公正公平に判定を下したり、直接プレーに関与しなくても、ゲームに関わることで楽しさが増すことに気付くことができたのである。（育てたい力③）

その後、繰り返しいろいろな役割を経験することで、自分なりの楽しみ方でゲームに関わりはじめ、「公平に審判ができてよかった」「得点につながるアドバイスができた」と肯定的に自己評価できるようになった。自己肯定感の高まりにより、チームへの所属意識が強くなり、学級全体としても、よりよいゲームをつくらうという意識になっていったのである。



チームの得点を喜んでいる子ども

② もっとゲームを楽しみたいな

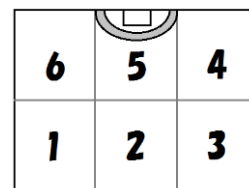
第1次の各授業の終末には、規則の工夫による楽しさの変容を問うた。**【支援イ】**すると、自分だけでなく、友達も楽しめる規則の工夫を考えるようになったり、共感的に理解しようとしたりする姿が見られた。**(育てたい力②)**

第2次以降の終末には、役割や動きを観点に振り返るよう促した。**【支援イ】**すると、「審判がしっかりしているとゲームが楽しい」「アドバイスのおかげでシュートができた」「パスを出した後に動くといい」とそれぞれのよさから運動の楽しさを感じている姿が見られた。**(育てたい力②)**シュートしたり勝てたりする楽しさだけでなく、正しいジャッジができたことに喜びを感じたり、多くの役割に挑戦できたことに楽しさを見出したりし、多様な楽しさがあることに気付いたのである。

③ どこに動けばよいのかな

第2次では、子どもたちの意識が「規則」から「動き」へと移行していることを個々の振り返りから見取った際、「どこに動けばよいのか分からない」という発言を取り上げ、6分割したコートを示した。

【支援ウ】すると、ディフェンスのいない場所を指示しながら、パスが繋がったり、シュートが決まったりする様子が見られた。**(育てたい力①)**



6分割コート

6分割コートを生かすことで、ディフェンスのいない場所を意識することができたのである。

また、各チームに6分割した作戦ボードを用意し、チームでの話し合いに活用するよう促した。「3番から4番に動こう」「シュートは4番か6番でねらおう」と、6分割コートを生かした動きを考えるようになったのである。さらに、授業後の振り返りで、「番号自体をコートに分かりやすく表示することで、動く場所を意識しやすくなるのでは」という意見があったので、次の時間には数字をコート



ディフェンスのいない場所に動いてパスを受けようとする子ども

に明示した。その結果、パスを受けたりシュートができたりする場所に正確に動くことができるようになり、得点の場面が増え、これまで以上にゲームを楽しむことができたのである。

(3) 授業の考察

本実践では、ゲームを楽しむことを中心に取り組んできた。その中で、攻めたり守ったりする楽しさに加え、アドバイザーや審判の役割を経験することで、ゲームに多様に関わる楽しさに気付く姿が見られた。また、それらを振り返りの際に共有していくことで、ゲームへの関わりを工夫しようとすることができた。「シュートができた」「ディフェンスができた」「アドバイスができた」「審判ができた」など、一人ひとりが様々な役割をとおして、「できた」を実感することが、ゲームを楽しむことにつながったと考える。また、技能面に関して、6分割したコートを示すことで、ディフェンスのいない場所への意識が高まり、積極的に動こうとする姿が見られた。それは、視覚的に認識することができたからだけでなく、先にも述べた、アドバイザーの役割も大きいと考える。互いに見合い、教え合うことをとおして、動きも高まったのである。

しかし、ディフェンスのいない場所への動きやアドバイスが、全て得点に結び付いたわけではなく、パスやキャッチ、ドリブルの技能の低さから、ディフェンスに早い段階で取られてしまっていた。子どもたちの考えが実行できる技能の定着の必要性を感じた。

今後は、子どもたちの「できるようになりたい」「もっと楽しみたい」という思いを膨らませながら、ボール操作や体を巧みに動かす力を計画的かつ系統的に身に付けさせる実践に取り組み、子どもたちの運動欲求をさらに引き出す授業をつくっていきたい。